
邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

雷都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神のデープ・キス ～ワンダーランドは眠れない～

【Nコード】

N4800Z

【作者名】

雷都

【あらすじ】

舞台は、眠りの世界である【ワンダーランド幻夢郷】と、覚醒の世界である【モト幻滅郷】の、ふたつに分けられます。

ワンダーランドのアリスが生み出した邪神を、モノトニーランドに暮らす高校生の「国広太一（主人公）」が退治する。というのが、大まかな筋です。

邪神を倒すべく戦う太一ですが、彼自身もまた、邪神「クトウル」

の力を秘めていました。

そして、クトウルー（タコ）としての力をすべて引き出すために、ワンダーランドにいた八人の少女と契約しなくてはならないことを知ります。契約の方法は、「女の子とキスをすること」。

かくして、八人の女の子と契約をすることになった太一。人間と邪神のはざままで葛藤しながらも、太一は仲間を守るために、他の邪神と戦うことを決意します。

プロローグ（前書き）

タイトルからおわかりになるかと思いますが、クトゥルー神話と不思議の国のアリスを、混ぜあわせたような世界観になっています。

ちなみに作中では、「クトゥルー神話」および、「不思議の国のアリス」という作品は存在しません。そのことを念頭において、お読みください。

両作品を知らなくても、楽しめる話になっています。

プロローグ

人の意識が届かない幻夢郷【ワンダーランド】で、少女の魂がさまよっていた。

眠りの世界では、彼女は何にでもなれた。

万物の根源　少女観念体【ヨグソトース】だった。

彼女は何にでもなれる。それ故に、彼女は何者でもなかった。

偏在しながらも、孤独である少女の魂に、ある男が近づいていく。

眠りの深淵にもかかわらず、男は意識を保っていた。

彼は少女の魂へ物語る。

それは、『アリス』という少女が、不思議の国を遍歴する話。

明晰夢のように、素敵なお伽話だった。

はじめは警戒したものの、少女の魂は、男の話を食い入るように聞きだした。

しかし。

『アリス』が赤の女王に追われるシーンで、男は口をつぐんでしま

う。「ねえ。それからどうなるの?」

少女の魂は、続きを催促する。

男は答えずに、ゆっくりと手を差し伸べた。

そして、ありったけの可愛さと、わがままを込めて。

少女の魂に実体を与えた。

「物語の結末は、君が見つけてごらん」

再び口を開いた男は、少女観念体【ヨグソトース】から生まれ
た女の子の、名前を呼んだ。

「アリス」

男が去った後。

アリスは、幻夢郷【ワンダーランド】を独立国家にした。好奇心を満たすために、ひたすら不条理な法律をつくった。陽気で愉快的仲間たちと、宴を楽しんだ。

アリスの物語は、ハッピーエンドを迎えようとしていた。だが。

覚醒世界に住む者たちが、彼女の物語を書き換えていく。目覚めたまま、夢を犯した。

アリスに淫らな妄想を押し付けた。

少女の体は、気持ちよくなる道具に変えられた。

幻夢郷【ワンダーランド】は腐敗し、暴力と放蕩がはびこった。

それは、欲望だけの革命だった。

独裁者の権力を、アリスは失った。

瀟洒なドレスの下で、柔らかい肉体が震える。

『何故……。』

私の痛む顔を、そんなにも悦ぶの？

如何して……。

私から滴る血液を、そんなにも唾うの？』

夢で生まれた少女は、自分のいる場所が悪夢だと知った。

押し込められた劣情に、アリスの体は白く潤る。

だが反面、涙は枯れていた。

かつて流した涙の池は、泥濘となった。

仲間たちは、目覚めの世界へと逃げていった。

夢の世界の果てで、独りきりになったアリスは、覚醒の世界を憎んだ。

赤児のように泣いた。

それは、虚ろなフルートの音色に似ていた。

ゴボリ。ゴボリ。

アリスの白い肌が、青黒く泡立ち、膿んでいった。

膿は、臓物を煮詰めたような臭気を漂わせた。

「復讐よ」

体を覆う膿に、アリスは命令する。

「復讐しなさい！ 覚醒の世界に生きる者どもの、皮を削ぎ、爪を剥ぎ、肉を焼き、骨を削り、眼を磨り潰して、脳に悲鳴を流しこむのよ！」

彼女の声に、従うように。

泡のなかからは。

ゴボリ。ゴボリ。

名伏しがたき肉塊が、生まれ落ちた。

肉塊は雄叫びを上げ、異臭を放ちながら、奇怪な姿で動き出す。

邪な神が誕生した瞬間だった。

誰もいなくなった幻夢郷【ワンダーランド】で、闇が祝福していた。

腐った肉のこすれ合う音が、互いの福音となった。

アリスは決意した。

少女という、自らは語りかけぬ受動と呼ばれた肉体で。

いま、総てを物語る。

暗黒神話の大系を、語り尽す。

「出てきなさい！ 私の邪神【ぬいぐるみ】たち」

アリスに込められた、自分を陵辱した者たちへの怒りが、憎しみが、恨みが、吐き気が、殺意が。

膿から這い出る。

異形たちが、とどまることなく溢れてくる。

アリスは、産み落とした邪神の群れを見渡して。

晒っていた。

（もうすぐ、愚かな覚醒の民は気づくでしょう）
真実は捏造されていたと。

「すべての価値観は、反転するわ。真の理とは、

驚異こそが平常で！
瘴気こそが定常で！
病理こそが健常で！
猟奇こそが、正常なのよ！
そして……」

アリスは、眠りと覚醒の境界を、見上げながら続ける。

「浅瀬に戯れるものが、最も深い闇を知り！
優雅に羽撃くものが、最も重い罪を負い！
無垢に微笑むものが、最も鋭い歯を隠し！
覚醒に暮らすものが、最も脆い生に縋っているのよ！」

アリスの叫びを皮切りにして。
邪な神たちの哄笑が、次元を超えて響きはじめた。

第一章・その一

朝起きたら、俺の目の前に、気色悪いバケモノがいた。

ヘドロのようにぐちゃぐちゃしたバケモノは、「テケリ・リ」といった感じの、この世のものとは思えない声で笑った。

「なんだ。こいつは」

俺は試しに、デコピンをかましてみる。バケモノは見た目どおり柔らかく、俺が弾いた指は、ヤツの体へとめり込んだ。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

バケモノは叫びながらのた打ち回ると、消えた。

「……どうなってやがるんだ」

俺はベッドから起き上がり、バケモノがいた場所を確認してみる。ヤツの痕跡はどこにもなく、ただ俺の頭の奥に、耳障りな笑い声が残響しているだけだった。

朝っぱらの怪現象。だが、異変はそれだけじゃない。

寝ている間に枕へ垂らした、俺の唾液が、真っ黒だったのだ。

「まるで墨みたいだな」

俺は、枕のシミを見ながらつぶやいた。やはりこれは、俺の仕業なのだろうか。

試しに、手の甲をなめて確認してみる。

透明だった。

そりゃそうだ。唾液が黒いはずがない。

（寝ばけてるんだな。俺）

バケモノも、黒い唾液も、なにかの見間違いだろう。俺は自分をそう説得し、階下へとむかった。朝食の準備をしなくてはならないのだ。

幼いころに母さんを亡くした俺は、親父と妹の三人で暮らしている。が、このふたり、超がつくほどの料理ベタだった。とても人が食べられるものではない。

よって消去法的に、俺が料理をまかなうことになっている。

焼き魚に白飯、豆腐とワカメのみそ汁という、平凡な朝食をこしらえていると、親父が起きてきた。よそったばかりの白飯を、一口つまみ食いする。行儀の悪い男だ。

「おい太一。米は柔らかめに炊けと言っただろう」
「うるせーよ」

行儀悪いうえに、ダメ出しとは。我が親父ながら、いい度胸していやがる。

「嫌なら食つな」

俺はそう吐き捨て、料理の続きにとりかかる。

「ふえ〜ん。ママ、太一がいじめるよお〜」

甘えた声をだして、親父が奥の間へと走っていく。奥の間には、親父が作った母親の等身大ドールがある。

立体造形師である親父は、人としては最下層だが、造形の腕だけはたしかだった。遺影の代わりに製作した母さんのドールも、かなり精巧につくられている。もっとも、俺には、母さんの記憶があまりないのだが。

「ママ。太一がいじわるするよお」

「悪かったよ。見苦しいから、やめてくれ」

母さんの人形にすがる親父があまりにも哀れだったので、俺は謝った。まったく、世話の焼ける人だ。

「お兄ちゃん。おはよう」

眠そうな目をこすりながら、妹の蓮も起きてきた。

「ああ。さつそく飯にするぞ」

魚が焼けた匂いが、リビングに充満していた。

「いただきます」

家族そろって、手を合わせる。俺たちはいつも三人で食事をとることになっていた。「ご飯を食べるときは、みんな一緒じゃなきゃだ！」という、親父の方針によるものだ。

まあ、家族で食事することに異論はないのだが。

妹の食生活を見てみると、なんだか食欲がなくなってしまう。

「……なあ、蓮。たこわさばかり食うなよ」

「うーん」

「たこわさが好きなのはわかるけど、魚も食べよ。せつかく焼いたんだし」

「うーん」

「朝からたこわさを貪り食う女子中学生を見てたら、一日の活力がなくなるよ」

「うーん」

生返事をくり返すだけで、ぜんぜん聞く耳をもたない。ダメだこりゃ。

「蓮が食べないなら、お父さんもらっちゃうぞ」

親父が、蓮の焼き魚を奪う。意に介さず、たこわさから顔を上げない妹。

見慣れた光景だった。

食事を終え、俺は洗面台で歯を磨いていた。

すると、またしても異変が起きた。

「テケリ・リ」

バケモノが現れたのだ。

寝室で見たバケモノとは、少し違うような気もしたが、腐った水あめみたいな体は共通で、やはり気持ち悪かった。

しかも、磨いていた俺の口のなかは、真っ黒な泡だらけになっていた。

「見間違いじゃ、なかったのか」

俺の体はどうかしてしまったらしい。

とりあえず、口中の泡をすすいでから、洗面台に付着した黒い液体を洗い流す。こんなところを蓮にでも見られたら、ややこしいことになる。俺は、唾液が黒いという証拠を、必死になって隠滅していた。

「テケリ・リ」

慌てふためく様子がおかしかったのだろう。バケモノは、俺を見ながら笑っていた。

とくに眼球らしきものも口らしきものもあるわけではないが、バケモノは確かに、俺を嘲笑していた。

「お前の愚行、万死に値するぞ」

バケモノへ、指を鳴らしながら近づいた。俺は、バカにされるのが何よりも嫌いなのだ。売られた喧嘩は買い占める。相手がたとえ、ヤクザだろうと、バケモノであろうとだ。

デコピンの餌食にしてやる。

「失せろ」

弾いた俺の指が、バケモノを粉碎する。

「テケリ・リ！ テケリ・リ！」

寝起きのと時と同じように、ヤツは奇っ怪な声をあげ、跡形もなく消えた。

ふん。

なんだかよくわからんが、俺をバカにする奴は、あの世で反省するんだな。

「ねえ、お兄ちゃん。何やってんのー」

蓮が、ドアを激しくノックした。

「早く出てよー。遅刻しちゃうよお」

「悪い。ちよっと待ってる」

俺は鏡で、口のなかを確認してみた。もう、唾液は透明に戻っている。おそらく、あのバケモノが近づいてくると、黒くなるメカニズムなのだろう。

俺は、なにこともなかったかのように、扉を開けた。

「なにやってたの、お兄ちゃん」

「ちよつとな。バケモノがでたんだけ」

「……え？」

「なんか、黒いナメクジが何百匹も集まったような、変なヤツだけ」

「やめてよそういう話！ お兄ちゃん、レンがお化け嫌いなもの知ってるでしょ」

蓮は泣きそうな顔で、怒った。

「本当なんだって。さっきまでいたんだよ、ちょうど蓮が立っているあたりに」

「もう！ 怖がらせないでよ」

「心配するな。俺が、デコピンで粉砕しておいたから」

「そ、それならいいけど……」
安心する蓮。

こいつは昔から、霊とかお化けとかいう類が苦手だ。靈感なんてなくせに。たいていこういう奴は、見えないものを想像しすぎて必要以上に怖がっているだけなんだ。俺もお化けらしきものをはじめて見たが、ちょっと気色悪いだけで、なんてことなかったぞ。

「つて、ホツとしてる場合じゃないよ！ 早く準備しなきゃ！」

蓮はバタバタと鏡の前に立ち、顔を洗いだした。

「じゃあ、俺は先に言ってるぞ」

「あつ。待って、お兄ちゃん……」

洗面所を出ようとした俺を、蓮が引きとめる。洗ったばかりのびちゃびちゃの顔は、なぜか神妙だった。

まさか、気づかれたのか？

俺の唾液が黒くなっていることに。

だが、蓮の一言は、俺の予想とは違っていた。

「……そのお化け、おでこあるの？」

「いや、ないけどさ。指で弾いたら、どこであろうとデコピンなんだよ」

「そんなものかな……」

蓮はいまいち納得していない様子だった。

なんだってんだ。急にまじめな顔をするから、ビックリしたじゃねーか。

とにかく、俺の唾についてはなににもバレていないようだ。

俺は胸をなで下ろしながら、カバンを持って玄関へと向かった。
靴を履きながら、俺は考える。

(しっかし、まさか唾液が黒くなるなんてな)
今のところ、人体に影響はないようだが、俺にとってはこれ以上ない悪影響があった。

唾液が黒くなるなんて、この国広太一には、あつてはならないことなのだ。

それはなぜかというところ……。

(キスが、出来なくなる)
たかがそんなことかと、笑うなかれ。俺にとってキスとは、レーゾンデートルそのものなのだ。

というのも、俺にはなぜか、子供の頃からキスに関する超絶テクニクがあった。近所の女の子を始めとして、その姉妹、あるいは母親、果ては幼稚園の先生や歯科衛生士にいたるまで。不意をついた俺のキス攻撃によって、メロメロにした女性は数えきれない。

そして俺は、『舌の曲芸師』とか『吸盤王子』とか、『キス神』とまで呼ばれるようになった。
もつとも。

俺のキスには自分でも怖くなるほどの催淫効果があるので、ここ最近では自粛していたのだが。

(唾液が黒いとなったら、キスの魅力も、激減するだろうな)
くそう、商売あがったりだ。

『キス神』の看板を、下げるはめになる。

「俺がなにをしたっていうんだ」
ペツ。なかばヤケになって、俺は庭に唾を吐き捨てた。
庭に広がる、俺の唾液は。

真っ黒だった。

第一章・その二

俺は悪夢を見ているのかもしれない。

もしそうだとしたら、いつかは覚めるだろう。

そんなことを考えながらも、とりあえず俺は、通っている「ルルイ工学園」へと向かった。

朝の通学路に、変化らしきものはない。嗚呼嚙町はいつもどおりだ。

おかしいのは俺だけみたいだ。

「おはようだよ。太一」

俺に近づき、あいさつをする姫カットの女の子。

幼馴染みの城座 実乃莉みのりだ。彼女とは、幼い頃からの付き合いがある。

実乃莉もいつもどおり、頭に赤いリボンをつけ、のんびりと微笑んでいた。

「ああ……おはよう」

できるだけ平常心を装いながら、俺はあいさつを返した。今はあまり口の中を見せられない。もごもごと、歯切れの悪いあいさつになっってしまった。

「どうしたの、口をおさえて」

「いや……別に」

「もしかして、口臭を気にしてる？」

「ふっ。愚問だな」

俺は肩をすくめてみせた。

キス神と呼ばれた俺が、口臭の手入れを怠るわけがないだろう。

しかしだ。唾液が墨のようになっていいることがバレルよりは、いっそのこと、口が臭いと思われたほうがマシかもしれない。

黒い唾液をとるか、口臭をとるかで悩んでいると。

俺たちに向かってノラ猫が数匹、歩いてくる。

ここら一体の猫たちは、実乃莉になついていた。彼女からは動物を引き寄せるフェロモンでもでているのだろうか。猫たちはこぞつて甘えた声で鳴くと、彼女のふくらはぎに頬をすり寄せる。

「すごく、可愛いんだよ」

実乃莉は猫を撫でながら言う。

「太一も、撫でてごらんよ」

「いや。俺はいい。あまり気に入られてないようだからな」

「どうしてそう思うの」

「だって、ほら」

俺は猫たちの尻尾を指さした。

「こいつら、尻尾を立ててるぜ」

「太一に近い猫ほど、立ててるね」

「やっぱ嫌われてんだ」

「そんなことないよ。猫が尻尾を立てるときはね、甘えてるんだよ」

そうだったのか。てっきり、警戒しているのだと思っていた。

ちよつと嬉しくなった俺は、猫たちの頭を撫でてみた。

「ふむ。こうしてみると、案外かわいいものだな」

「でしょう」

俺たちが猫と戯れていると。

とつぜん。辺りが暗くなった。まるで夕暮れ時のように、灰色の闇に包まれている。

「なにが起きたんだ」

朝からハプニングつづきの俺は、もうなにがなんだかわからなくなつた。

だが。慌てているのは俺だけのようだ。

実乃莉はというと、いよいよこの時がきたかとはかりに、覚悟の決まつた表情になつていた。

「ついに、本格的な【星辰異常】が起きたんだよ」

「おい実乃莉。それはどういう意味だ」

わけのわからないことを言っている。長年つきそってきた無二の幼馴染が、遠くに感じられた。

「説明はあとだよ。とにかく今は、アイツを倒すことだけを考えて」
実乃莉が見上げながら指さした先には。

巨大なコウモリのような影が、俺たちを見下ろしていた。

「な、なんだ……あいつは」

「ナイトゴントだよ」

実乃莉が言った途端。ナイトゴントと呼ばれたそれは、俺たちに向かって急降下する。

ギロチンのように落下してくる巨大コウモリを、俺は間一髪でかわした。横に飛び、地面を転がる。

「実乃莉！ 大丈夫か！」

俺は起き上がり、実乃莉の方を見た。彼女は、ナイトゴントの行動を予期していたかのごとく、軽やかにかわしていた。

「わたしは大丈夫だよ。でも、猫たちが……」

ナイトゴントの一撃によって。

集まっていた猫たちは、惨殺されていた。アスファルトを赤く染める、動かぬ肉塊になっていた。

「なっ……」

俺が、見るも無残な光景に言葉を失っている。

シューウウウウ。

蒸発するように、猫は消えた。

「てめー。猫どもをどこにやった」

俺はナイトゴントに問い詰める。だが、コウモリの姿をしたそいつには、顔がなかった。聞く耳も、話す口もなかった。

夜空を濃縮したような闇だけが、頭部を形づくっている。

代わりに、実乃莉が答えた。

「太一。残念だけど、猫たちは存在ごと消えてしまったんだよ」

「くそつ。せつかく仲良くなったつてのによ！」

俺は握り拳をかためる。このコウモリもどきは、デコピンだけじ

や済ませねえ。

「猫たちに、地獄で詫びろ！」

ナイトゴーストに、全力で殴りかかった。顔のない頭部に拳がめり込む。

クリーンヒットなはずだ。

だが、手応えはまったくなかった。

「キュケエエエエ！」

耳をつんざく甲高い声を出しながら、ヤツは翼を振り払う。羽による攻撃をもろに食らった俺は、激しくふっ飛んだ。

「くっ……。なんてパワーだ」

俺は胸をおさえながら立ち上がる。打ちどころが悪ければ、内臓が破裂していたかもしれぬ。

「今のわたしたちのじゃ、アイツには勝てないよ」

実乃莉が、俺に耳打ちする。

「だからつてよ。素直に負けを認める気はねえぞ」

「もちろん。アイツを倒す方法は、あるんだよ」

「どうすりゃいいんだ？」

「こつするんだよ」

実乃莉は俺を抱き寄せると、キスをした。

なにをしているんだ。こんな緊急事態に。実乃莉はもう、俺の知っている幼なじみではなかった。

離れようとしたが、実乃莉は俺の首に手を回し、強く引きつけてくる。

唇が、舌が、絡みついていく。

「キュケエエエエエ！ キュケエエエエエ！」

ナイトゴーストは飛び上がり、頭上で好色な金切り声を発していた。それでも実乃莉はキスを止めない。

みるみるうちに、実乃莉の体が黒く染まっていった。おそらく、俺の唾液のせいだろう。

彼女の白かった肌が、漆黒になったところ。実乃莉はポケットから、

一冊の本を取り出した。

「これは魔導書の【ナコト写本】だよ。太一に秘められたクトウルの力を、引き出せるんだよ」

おお。なんか凄そうなものがでてきた。俺は不覚にもテンションが上がった。

しかし、魔導書という魅力的な響きと、禍々しい表紙とはうらはらに、彼女が開いたページは白紙だった。

「なんも書いてねーじゃん」

俺は、白いページをのぞきこみながら突っ込む。

だが実乃莉は、俺にかまわず魔導書のページを一枚ちぎって、宙へ放った。

「ナコト写本よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾヘドロンに誓って、我に力を与えるんだよ！」

詠唱と同時に。

白紙のページは、瞬間に巨大化する。

さらに、実乃莉が着ていた服は消失した。

代わりに白紙のページが、彼女の体を包んだ。黒い肉体が、紙面へ押しつけられる。

実乃莉を黒く染めていた俺の唾液は、たちまち、魔導書のページへと染みこんでいく。

無地だった魔導書のページに、女拓が完成した。

その途端。実乃莉は、まばゆい黒と白の光に包まれた。なにか大きな力と力が、融合しているようだった。

光が鎮まると、魔導書の断片はどこかに消えていた。

中から現れたのは、すっかり変身をとげた実乃莉の姿だった。

ひらひらのドレス。

一回り大きくなったりボン。

そして、髪の毛が触手になっていた。

第一章・その三

「覚悟するんだよ!」

実乃莉は、ナイトゴーストへ向け宣戦布告する。

「この竜殺しの氷剣【ヴォーパル・ソード】で、切り裂いてあげるんだから!」

俺たちが隔離された、薄暗い空間に。実乃莉の啖呵が響きわたった。

彼女の右手には、二メートルほどの、巨大な氷の剣が握られている。

「わたしの邪技は、空気中の水分を凍らせて、武器を作り出すことなんだよ」

「それはすごいな」

まさか俺の幼なじみに、そんな技能があつたなんてしらなかつた。しかし今は、あれこれ詮索するよりも、目の前の敵を倒すことが先決だろう。

実乃莉のかくし芸に、託すしかないようだ。

「キユケエエエエエ!」

またしてもナイトゴーストは急降下する。狙いは実乃莉だ。一直線に向かつていく。

「えいつ!」

気合を込め、氷剣を振り下ろす。だが、少し遅い。

ナイトゴーストは旋回し、直撃を避けた。右の翼を切り落とされながらも、残った左の翼で反撃する。

バシツ、という激しい音をあげ。

実乃莉が後方に吹き飛ばされた。空中を一回転していく。その拍子に、氷剣はこなごなに砕け、ダイヤモンドダストになった。

「実乃莉!」

「……わたしは、平気だよ」

みごとに着地すると、実乃莉は言った。ダメージは浅いようだ。一方、右の翼を切り落とされたナイトゴントは、片翼をばたかせていた。再度、飛ぼうとしているのだろう。

だが、いくら羽ばたいても、ヤツの体が舞うことはない。

チャンスだ。飛行能力を失ったいまなら、ヤツを仕留められる。

でも、どうすればいい。俺の物理攻撃では、ヤツに致命傷を与えることはできない。かといって、実乃莉の氷剣は折れてしまった。

なにかいい方法はないかと考える俺に、

「流しこむんだよ！」

実乃莉が、アドバイスした。

「おい。流しこむって、何をだ？」

「太一の唾液だよ」

それはあれか。このコウモリもどきに、キスをしろってことなのか。

「なんで、そんなことをしなきゃなんのだ」

「太一に目覚めたクトウルの力で、あいつの邪な力を、相殺させるんだよ」

実乃莉の説明では、いまひとつ原理がわからなかったが、とにかくキスさえすれば、この窮地を抜け出せるようだ。

俺は、幼馴染の言うことを信じた。

ナイトゴントへ、正面から近づいていく。

対峙したとき、俺は、もうひとつの問題を発見した。

「キスをしろってよ……。こいつ、顔が無いじゃねーか」
しかしだ。

こんなことで、キス神と呼ばれた俺を、とめられるわけがない。それにさつきは、幼馴染にみすみ唇を奪われるという失態を、演じてしまったからな。汚名返上だ。

俺は暴れるナイトゴントを抱きかかえると、顔のない頭部に接吻した。

闇のように黒いヤツの頭部に、同じように黒い俺の唾液を流し込む。コウモリもどきは俺の腕の中でバタバタと暴れた。ずいぶんとお転婆なヤツだ。

だが、俺の口づけからは逃れられない。

より深く、キスをする。なんとも言えない闇の味がした。濃厚で、むせ返るような死の香り。

きつと夜空を舐めたら、こんな味がするのだろう。

俺は、喉が枯れるほど唾液を流し込んだ。はじめは暴れていたナイトゴントも、徐々に力が抜け、ぐったりする。

ヤツの体からは、闇が消えていった。それと同時に、俺たちを隔てていた薄い暗がりも、晴れていく。

暗闇はなくなり、今まで通りの通学路に戻っていた。朝の喧騒がよみがえる。

ナイトゴントは、俺の腕のなかで小さくなっていく。なにも映さなかった頭部が、可愛らしい女の子の寝顔に変わった。

ヤツは、コウモリの姿から、女の子になった。

「よくやったね。太一」

振り返ると、実乃莉が俺に微笑みかけた。彼女は、いつも通りの格好に戻っている。

いつもの制服。いつものリボン。そして、いつもの髪の毛だ。

窮地は抜けたらしい。日常を取り戻したんだ。

ホッとするも束の間。

ふと、腕のなかで眠る女の子を見て思う。こんなたいけな子どもに、俺はデープ・キスをしていたのかと。

それは一線を超えたことではないだろうか。もし、その瞬間を目撃されていたとしたら、俺の人生は終わる。

「安心していいんだよ」

俺の不安を見ぬいた様子で、実乃莉はいった。

「さっきまでわたしたちを包んでいた暗闇はね、【少女悪夢】（アリス・マリス）って言うんだよ」

「少女、悪夢……」

「少女悪夢で起きていることは、悪夢のなかにいる人たちにしか見えないんだ」

つまり俺たちの戦いは、通行人からは見えなかったということか
それなら安心だ。

とはいえ、少女悪夢から解放された通学路では、そろそろと人が動きはじめている。こんなところで、いつまでも童女を抱いているわけにはいかない。

「おい。起きろ」

俺は童女を揺さぶる。起きる気配はまったくない。かすかに胸が起伏しているので、生きているのは確かだ。

彼女は、昏睡していた。

「まいったな」

「とりあえず、救急車を呼ぼうよ」

「いいのかそれで」

さっきまで、コウモリだった奴だぞ。この子が昏睡する原因を、現代医学で解明できるとは思えないのだが。

「大丈夫だよ。おそらく、脳の障害ってことで対応してくれるよ」

「なら、いいんだが」

他にいい方法があるわけでもない。ここは実乃莉の言うとおり、病院にまかせるのがベストだろう。

実乃莉がケータイをとりだし、119にかける。

「目の前で女の子が倒れたんです。病院までの搬送を、お願いします」

テキパキとこなした。ふだんはブーツとしているくせに、いざという時は機転のきく奴だ。

その後、すぐに救急車が到着し、女の子は搬送されていった。

これで一件落着、になるのだろうか。

遠ざかっていくサイレンの音を聞きながら、俺は思った。まだまだ、未解決な問題がたくさんあるような気がする。

「ん？」

ふと足元を見ると、小さな箱が落ちていた。一辺が5センチほどの、古びた立方体だ。

さっきの女の子が落としたのかもしれない。俺は念のため拾いあげると、ポケットにしまった。

しかし今日は、朝から奇妙なことが立てつづけに起きている。バケモノに襲われたり、幼馴染が変身したり、バケモノが女の子に変わったり……。

それでも気が狂わず、理性を保っていられるのは、何事にも動じない強い心のおかげだな。俺はひそかに、強靭な精神力を自賛していた。

だが。

「ねえ太一。今日からわたしは……」

実乃莉の発言が、ついに俺の平常心を打ち砕いた。

「あなたの、足になるよ」

第一章・その四

な、なんだって！ 俺の足になるだと！？

それは一体どういう意味なんだ。俺は、その場で立ちすくんでしまふ。

「ほら。ブーツとしてないで。早く行かないと、学校、遅れちゃうんだよ」

先に、実乃莉が歩き出した。

彼女の後ろを、俺はあわてて追いかける。

完全に思考が止まった状態で、金魚のフンのように、実乃莉のあとについていくうちに。

ルルイエ学園に到着していた。

昇降口で靴を履きかえながら、実乃莉は訊く。

「ところで太一。さっき、何を拾ってたの？」

「……ああ。これだよ」

ポケットから、古く小さな箱をとりだす。さきほどは急いでいたのでよく見ていなかったが、箱の表面には、模様が刻まれていた。

星のマーク、いわゆる五芒星というやつだ。

星の中央には、横に一本、傷が入っている。

「あの子のものだろう。あとで届けてやろうと思ってな」

古びた箱をまじまじと見ながら、実乃莉が言う。

「これは、あの子のものじゃないよ」

「なんでわかるんだ」

「とにかくこれは、太一が持つべき箱だよ」

一方的に押し返されてしまった。実乃莉はいったい、何を知っているというんだ。

俺はしかたなく、箱をポケットにしまいなおしていると、

「よう、太一！ なにやってんだ」

背後から、ノーテンキな声が聞こえた。

陽気に肩をたたいてきたこの男。実乃莉と同じく、長い付き合いになる俺の悪友だ。

神世界しんせかい 銀河ぎんがという、アホみたいにスケールの大きい名を持っている。

「いや、まあ。朝からいろいろあってな」

「いろいろって、あれか。実乃莉ちゃんと、エッチでもしたのか」

オヤジのようなことをいう。考える内容のスケールは、小さい男だった。

「ところで太一。さっきの箱は、何だ？」

「なんでもないよ」

「婚約指輪か？」

「ちげーよ。バカ野郎」

銀河の頭を小突いてやった。奴はヘラヘラと笑っている。

まったく、俺は朝から修羅場をくぐり抜けてきたというのに。

「お前は、悩みごとがなさそうでいいよな」

「それがさあ。そうでもないんだな」

銀河は、急に暗い表情になった。

「俺の弟が、最近おかしいんだ」

うむ。失言だったな。どんな人間にも悩みはあるもんだ。いくら

バカな銀河とはいえ、悪いことを言った。

「弟が、どうかしたのか」

「アニメのキャラに、ハマってるんだ。恋をするほど」

「別にいいんじゃないか。今はそういうの、珍しくないだろう」

「それがさ。毎晩毎晩、抱きまくらに向かって、話しかけてるんだ」

抱きまくらか。それは、ビミョーな一線だな。

銀河が不安になるのも無理からぬことだ。少し事例は違うが、俺も毎日、人形に話しかけるダメな男を知っている。

俺からは良いアドバイスを受けられないと察した銀河は、実乃莉に話をふった。

「実乃莉ちゃんは、どう思う？」

「構わないと思うよ。恋愛の形は、人それぞれだよ」

「あら寛大」

心の広い実乃莉の意見に、銀河は安心したようだった。憑き物が落ちたように、弟の事情を話しはじめる。

「じつは今日ね。キャラの中の人に、会いに行くんだって」

「つまり、声優のことが」

「そう。ファンクラブの特典で、握手会に参加するんだ。これで弟も少しずつ、現実を取り戻してくれたらいいんだけど」

取り戻す現実の先が声優というのも、また危なっかしい気がしないでもないが、それは言わないでおいた。他人の趣味をとやかく言うような野暮なことはいらない。

「ふたりに相談してみてよかったよ。ありがとう！」

銀河は満面の笑みを見せると、先に教室へ入っていく。俺からは気の効いたことを言ってやれなかったが、奴の悩みは軽減されたように、何よりだ。

俺たちもすぐに、同じ教室に入る。

すると、実乃莉がそつと耳打ちしてきた。

「昼休みに、三階の会議室まで来てほしいんだよ」

ん？ 会議室だと。

あそこはたしか、うかがい知れない部活動の拠点になっていたはずだが。

名前は、えつと……。

だめだ。思い出せない。

実乃莉はそれ以上にも言わず、自分の席へと向かう。なんだろう。どこか不穏な感じがする。

重要な話でも、あるのだろうか。

第一章・その五

けつきよく。午前中の授業は、実乃莉の発言が気になり、集中できなかった。得意な数学も、あてられた問題を間違えるという、ハマをやらかしてしまった。

吃音のはげしい数学教師が言う。

「め、珍しいですね。た、太一君が、ケ、ケアレスミスをするなんて」

おっしやるとおりだ。俺は見かけによらず、細かい計算が得意だというのに。

後ろの席からも、銀河がささやいた。

「太一、悩みでもあるのかよ」

「まあな」

「へえ。太一でも、悩むことがあるんだなあ」

銀河は、心底おどろいた様子だった。

お前にだけは言われたくないと思ったが、今朝のことがある。それに、嫌味でいつているわけではなさそうなので、デコピンをするだけにとどめた。

集中力は戻らないまま、昼休みをむかえた。そそくさと弁当を食べ終えると、実乃莉に言われたとおり、会議室へと向かう。

三階の、いちばん西側にある部屋。ここが指定された会議室だ。

「邪魔するぞ」

「やあ、待ってたよ」

実乃莉が出迎える。室内には、彼女以外に二人の女生徒がいた。そのうちの一人が、俺が見るなり勢い良く立ち上がる。ドリルのような縦ロールにティアラを載せた、いかにもお嬢様といった出で立ちだ。

「たしか君は、となりのクラスの練環ねじわさ……」

「黙りなさいよ」

ものすごい形相でさえぎった。な、なんだってんだ。

彼女は、釣り上がった目で俺をにらむなり、憎悪をむき出しにして吐き捨てる。

「よくもまあ。わたくしの前に、のこのこと顔を出せたものですわ」

「ええっ……」

絶句する俺に、悪魔のような一瞥を投げると。そのまま、奥の部屋へと入っていく。

取り付く島もなかった。

「ごめんね。佐美ちゃん、ちょっと機嫌悪いみたい」

実乃莉が代わりに詫びる。だがあの怒りかたは、“ちょっと機嫌悪い”どころじゃなかったぞ。

「まあまあ、座ってよ。さっそく紹介するよ。こちらにいる娘は、学年がひとつ下の……」

「ボクは、佐藤くるみツス。よろしくツス！」

やたらと元気のよいあいさつだ。そういう子は、嫌いではなかった。

くるみと名乗った後輩は、短くまとめた髪に、ぶかぶかの黒いシルクハットかぶっていた。小柄でボーイッシュな風情なので、スカートをはいてなかったら、少年だと見紛うところだ。

「よろしくな！」

負けないように、俺も元気よくあいさつを返す。

「ところで。俺はなぜ、ここに呼ばれたんだ」

「あのね……。今から話すことは、すべて本当のことなの。だからね、真面目に聞いて欲しいんだよ」

急に改まる実乃莉。

俺としても、朝から超常現象に巻き込まれたんだ。ある程度、常識では通用しないことが起きているのは、覚悟できている。

「実はね。今わたしたちがいる場所 モントーランド 地球、ひいては宇宙全体の領域。ここはね、【幻滅郷】という、世界の一部に過ぎないんだよ。

そして、深い眠りの領域には、【ワンダーランド幻夢郷】と呼ばれる、もう一つの場所があるんだよ」

「それは、世界がふたつある、ということか？」

「厳密に言うとな。大きな世界のなかに、小さなふたつの世界がある。そう考えてもらいたいんだよ」

「そのふたつが、幻滅郷と、幻夢郷」

「うん」

「で。俺たちの世界と、その幻夢郷って場所に、何の関係があるんだ」

「今から百五十年くらい前にね。こちらの領域から、幻夢郷に渡った男がいたんだよ。彼は幻夢郷に、ひとりの女の子を誕生させた。

『何者でもあるが故に、何者でもなかった』存在に、『アリス』って名前をつけたんだよ」

アリスか。いい名前だな。

「彼はその後、すぐに幻夢郷を離れた。覚醒に生きる人間が、長くいられる場所じゃないからね。残されたアリスは、夢の国でのびのびと暮らしていた。仲間もたくさんできた。だけどね。楽しい時間は永遠には続かなかつたんだよ。幻滅郷の人たちが、彼女を犯したから」

「犯したっていうのは？」

「性的に、陵辱したんだよ」

実乃莉はそういうと、眉をひそめた。痛切な表情で話をつづける。

「アリスは、夢で暮らす女の子だから。人々が淫らな夢をみれば、彼女は犯されてしまうんだよ」

「それは、なんというか。気の毒だな」

「うん。それで、彼女の精神はおかしくなってしまった。でもね。もしかして彼女にいちばん酷いことをしたのは、幻夢郷の仲間かもしれないんだよ。仲間たちはね、暴れて手の付けられなくなったアリスを見捨て、この幻滅郷に亡命してきたんだよ」

そこまで話すと、実乃莉はうつむいた。言うべきことを整理する

ように、こめかみへ指をそえる。

少し悩んでから、顔を上げた。

「太一。わたしはね。その幻夢郷の住人だったんだよ」

実乃莉と目が合った。彼女は視線をそらさず、俺をまっすぐ見つめている。

「わたしだけじゃ、ないんだよ。くるみちゃんや、さっきの佐美ちゃんもそう。彼女たちも幻夢郷の住人」

嘘を言っている瞳ではなかった。そもそも実乃莉は、こんな誰も得しないウソをつくような奴ではない。

俺は戸惑いつつも、話のつづきを促した。

「それで、残されたアリスはどうなったんだ」

「一人きりになった彼女はね。復讐するため、ぬいぐるみたちを産み出したんだよ。名伏しがたい、グロテスクなぬいぐるみ。それは、遠い昔にこの宇宙を支配していた、邪神の復活を意味するんだよ」

「邪神の、復活……」

「そう。遙か太古、幻滅郷の宇宙は、邪神たちが支配していた。彼らは人間とは比べものにならないくらい、圧倒的な力を持っていたんだよ。だけど、星辰の運行によって、深い淵に封印された」

実乃莉は、ふいに窓の外を見た。

空は青く晴れ、ゆるやかに白い雲が流れている。

「あの彼方に、星々をめぐって邪神が蠢いているッス。人の身からすれば、ちよっと想像しがたいッスよね」

くるみが、かぶったままのシルクハットを、くるくると回しながら言った。

確かに青空は、争いとは無縁といった様子で広がっている。ここで話していることなんて、夢物語のようだ。

だが。

俺は空の青さよりも、幼馴染の言葉を信じることにした。

「話は理解したぜ。要は、夢の世界にいるアリス嬢ちゃんが、星を動かし、邪神を復活させ、俺たちのいる世界に復讐をはじめた。だ

から俺が、幻夢郷からきたお前たちと一緒に、邪神どもを倒す。そういうことだろ」

「うん。物分りがよくて助かるよ」

実乃莉は満足そうにうなずいた。

「んで、気になることがあるんだが。今聞いた話と、俺の唾液が黒くなったのは、関係あるのか？」

「いい質問ですねえ」

実乃莉は、人差し指を立てながら言った。

「今朝も言ったようにね。太一のなかには、クトウルーっていう、邪神の魂が宿っているんだよ。本来は、邪神と人間がキレイに融合するなんてありえないんだけどね。何者かのすぐれた魔術師によって、太一は、クトウルーと共存できているんだよ」

「邪神が、俺のなかにいるのか」

「それもとびつきりの奴がね。クトウルーは水の神性を持つ、強力な邪神だよ」

「ほほう」

「ひとことで言えばね。すんつごく大きな、タコの神様なんだよ！」

「……弱そうじゃねえか」

強力なんじゃなかったのか。ショックだ。邪神っていうから、もつとカツコいいのを想像していたのに。

「まあいいさ」

俺は、話題を切り替える。

「とりあえずだ。他の邪神たちが、どこからくるのか知りたい。今朝みたいに、急に襲われたらたまらん」

「今朝のナイトゴントはね、邪神ではないんだよ」

「そうなのか。いかにも邪な感じだったけどな」

「邪には違いないけどね。ナイトゴントは、邪神の下僕みたいなもんだよ。邪神っていうのは、もっとこう……」

実乃莉が言いかけたとき。

ガタンッ。

ものすごい勢いで、くるみが立ち上がった。

震える指で、窓をさしながら叫ぶ。

「ああ、窓に窓に！」

「なに。もう来たのか？」

俺は身構えた。さあ、邪神とやらよ。

「かかって来い！」
だが。

窓から見えたのは、メガネをかけた女生徒だった。ふたつのお下げを、水色のシユシユで留めている、地味な女の子。

「あつ。あんなところにいたんだ」

実乃莉が、メガネ女に近づき、窓を開けながら紹介する。

「この娘はね、潮 翔子ちゃん。くるみちゃんと、同じ学年なんだよ」

「で、もしかして」

「察しの通り。彼女も、元・幻夢郷の住人だよ」

邪神どころか、味方だった。

俺が拍子抜けしていると、

「ブヒヤヒヤヒヤハッ！ ひっかかったツスね、太一さん！」

くるみが抱腹絶倒していた。

ただの、ドッキリだったようだ。

「かかって来い、とか言っちゃって！ 年下の女の子になんて言ってるんツスか。ヒーヒーッ」

「お前。笑いすぎだぞ」

このテンション、なんとかならないのか。女じゃなかったら殴っていたところだ。

翔子と呼ばれた娘も、声は立てないものの、口を最大限に歪ませニヤニヤしている。人の醜態を心から楽しんでいるようだ。

こういう陰湿な笑い方のほうが、笑われる側としては辛い。

「太一、ごめんね。彼女たちは悪い娘じゃないんだよ。ただちょっと、悪ノリするだけで」

「なんとなく、幻夢郷がどんな所なのか、わかった気がするぜ」
俺は深いため息をついた。

実乃莉が、はげますように肩を叩く。

「まあ、これから『コール・オブ・クトゥルー部』として戦う仲間
なんだからね。仲良くしようよ」

「ん？　なんだその部は」

「わたしたちの、部活名だよ」

実乃莉は両腕を広げて言った。

「ここはね。クトゥルーに集いし八人の少女たちが、地球を守る。

そして、幻夢郷の平和を取り戻す。名付けて『コール・オブ・クト
ゥルー部』、だよ」

第二章・その一

『コール・オブ・クトゥルー部』なる活動に参加し、邪神を倒すことになった俺。なんでも、俺には、邪神の魂が込められているらしい。

ふだんから、俺は自分のことを神に近いなにかではないかと思っていたので、邪神を秘めていると打ち明けられても、さほど驚きはしなかった。

今のところは、これといった変化は見あたらなかったが。今朝だつていつもどおり、親父と妹に朝食をつくり、弁当まで用意したのだ。こんな家庭的な邪神は、世界中どこを探しても俺しかないだろう。

もつとも。妹の蓮は、相変わらず、たこわさばかりを食べていた。兄がタコの神さまであることも知らずに、いい気なものだ。

ほぼ今まで通りではあるが、しいて変化があるとすれば、「テケリ・リ」と笑うバケモノが見えること。そしてバケモノが近づいたときに唾液が黒くなることくらいか。それらは別に、日常を脅かすほどの変化ではない。まだ邪神の活動は本格化していないのだろう。他に、気になることと言えば。

銀河の弟である、太陽の様子がおかしいことくらいか。

通学路の途中で会った銀河は、弟の不穏な行動を報告する。昨晚、太陽が声優の握手会から帰ってきたのは深夜すぎ。家族になんの報告もなく、そのまま部屋に鍵をかけた閉じこもったという。

「なんかさ。太陽の部屋から、朝までギシギシ音がしたんだ」
銀河は、肩をおとしながら言った。

「あまり想像したくないんだけど。たぶん太陽の奴、夜が明けるまで、抱きまくらとハッスルしてたんだと思う」

「まあ、あれだ。好きな声優に会って、テンションが上がりすぎたんだな」

「限度があるだろ。あいつ、風邪ひいたみたいで、今日は学校休んでるんだ」

「暴走してるな」

「まいったよ。バカは風邪をひかないって、いうのに」

「バカだから、体調管理ができなくて、風邪をひくんだろ」

銀河は何も答えず、がつくりとうなだれてしまう。

弟の将来を憂いているのだろう。銀河は、ぼそりと呟いた。

「抱きまくらと交接して風邪をひく弟と、この先どう付きあえばいいかわからない」

銀河もなかなか大変そうだが。

俺は俺で、別の問題をかかえていた。

昼休み。四人の女生徒が集う会議室へ、足を運んだ俺に、

「あなたの顔なんて見たくない。わたくし、そう申したはずですよ」
練環佐美は、顔を見るなり毒を吐いてくる。読んでいた文庫本から目を上げた彼女は、縦ロールを指でこねくり回しながら俺をにらみつけてた。鋭い目付きと、頭のうえにのせたティアラが、キラんと光る。

なぜ俺を敵視するんだ。なにひとつ思い当たるふしが無い。俺は、女にだけは恨まれない生き方をしてきたつもりなのに。

「ねーねー。佐美ちゃんは、なに読んでるの？」

気まずい空気をきりかえるように、実乃莉が話をふった。

「研究しているのよ。魔導書についてね」

「魔導書がないと、わたしたち、幻滅郷で邪技を使えないもんね」

「そうよ。わたくしの研究成果あってなんだから」

「ホント、佐美ちゃんには感謝してるよお」

実乃莉が拝むポーズをすると、佐美は満足そうに鼻息を荒めた。

おだてられるのに弱いらしい。

うきうきした表情で、読んでいた本へ栞をはさむ佐美。タイトル

には、見たことのない文字が記されている。外国の書物なのだろう。本を閉じた佐美は、いつになくなめらかな舌で、実乃莉に話しはじめる。

「幻滅郷に来てから研究を怠らなかつたおかげで、いろんなことがわかってきたわ。たとえば、あなたが所持している“ナコト写本”だけれど。あれはね、人類が誕生するよりも前に書かれたものなのよ。ナコト写本には、最も古い神話が、図をまじえて説明されているらしいわ。さしずめ『図解・原初の神話』ってところね。一説によれば、ナコト写本は古代の北極圏から伝えられているそうだけれど……。人類誕生前に書かれていたなんて、いったいどんな生命体が記した書物なのか、非常に興味があるわね」

佐美はひとりで、うんうんと頷いていた。周りとの温度差に気づいていないらしい。一気にまくしたてると、今度はくるみに向きなおる。

「それで、あなたの魔導書はね……」

「あ、ボクは興味ないツスよ」

さらりと言われてしまった。

佐美はがっかりした様子で、「そう」とつぶやいたきり、黙ってしまう。つまらなそうに、ふたたび文庫本を読みはじめた。感情の起伏がはげしいやつだ。おそらく、自分の好奇心だけを基準にして生きているのだろう。

実乃莉はというと、くるみを見ながらほっぺたを膨らませていた。対するくるみは、シルクハットのつばをいじりながら悪びれた様子もなく口笛を吹く。

実乃莉が耳打ちする。佐美には聞かれないように、小声で話しあう声もれる。

「ダメだよ、くるみちゃん。せつかく佐美ちゃんが機嫌よくなつたのに」

「だって、興味ないツスもん」

「社交辞令を身につけないと、この世界では生きていけないんだよ。」

ずっとお茶会やっているわけには、いかないんだから」

実乃莉が説教をしている。だが、幻夢郷あがりの人間に、社交辞令を教え込むのは難しいだろう。

ふたたび室内が気まづくなる。今度は俺から話をふった。

「お前たちさ。幻夢郷にいたんだろう。その時の記憶って、残っているのか」

「残ってるんだよ」

実乃莉が、両手で胸をおさえながら答える。

「わたしは幻夢郷で、『バンダースナッチ』と呼ばれていたんだよ」

「どんな奴なんだ」

「それはね……言えないんだよ」

イタズラっぽく笑った。口元にえくぼができる。

俺は不覚にも、ドキッとしてしまった。秘密の作り方が上手いやつだ。

「太一さん。ボクはね、『マッドハッター』をやってたツスよ！」

「ふうん。マッドってあたりが、くるみっぽいな」

でかいシルクハットの下で、ナチュラルハイに笑ってくるみへ、素直な感想を述べる。じゃっかん皮肉のつもりだったのだが、彼女は気づいていないようだ。むしろ褒められた子どものように喜んでい

る。

俺は次に、メガネの娘に訊く。

「君は確か、翔子って言ったよな。あつちでは何やってたんだ」

「拙者は『チェシヤ猫』だったでござる」

「ほ、ほう。チェシヤ猫をねえ」

俺は曖昧にうなずいた。いったいどんな猫なのかは見当つかないが、それよりも、彼女の口調が気になった。拙者？ ござる？ 家訓かなにかによるものだろうか。

「んで。佐美は、なにをやっていたんだ」

「ちよつと。軽々しく、呼ばないでほしいですわ」

「いいじゃねえか、呼び捨てでもよ。同じ年なんだし」

「呼び捨てかどうかは関係ないですわ。あなたに、名前を呼ばれることが耐えられませんの」

ぐう。なんでこいつは、俺をそんなに罵るんだ。常に人を見下したような言い方しやがって。

「佐美ちゃんはね、『ハンプティ・ダンプティ』をやっていたんだよ。幻夢郷でもね、すごく博識だったんだよ」

「やっぱ、向こうでも本ばっか読んでたのか」

「そうだね。読書家だったよ」

「その、博識の佐美さんに訊きたいんだけどよ。この前、実乃莉が持っていたナコト写本とかいうやつ、ぜんぶ真っ白だったぜ」

佐美は、文庫本から顔を上げない。徹底的にシカトする気だ。

「なあ、魔導書と呼ぶには、ちょっとパチもんくさくねーか」

「太一。それには、血塗られた歴史があるんだよ」

実乃莉が代わりに答えた。

「血塗られた、歴史？」

「うん。中世のころになるんだけどね。魔導書を使い、邪神たちの力を蘇らせようとした教団があったんだよ。だけど、教会が彼らをまとめて弾圧した。大がかりな異教徒狩りによって、たくさんの信者が血祭りに上げられたんだよ。そのときにね、すべての魔導書は焚書されちゃった」

「ってことは。いま手元にあるのは、偽物なのか」

俺の発言に、ついに佐美が反応する。

「失礼ね。偽物だなんて」

文庫本の端かららんだ。どうも俺はさつきから、彼女の機嫌を損ねる言動ばかりをしているようだ。

俺を見つめる佐美の表情は、憎しみと蔑みに満ちている。

「レプリカと言ってちょうだい」

「似たようなもんじゃねえの」

「いいこと。魔導書のレプリカはね、本物に劣らない魔力をもっているんですわ。そして、この世界に現存するレプリカは、すべてわ

たくしの手によって再現されたんですわよ」「

崇めなさい、とばかりに彼女は胸をはった。

「なるほど。よく、わかったよ」

「わかればよろしいですわ」

「お前の胸は、えらく小さいってことが
「なっ」

佐美は両腕を胸の前にクロスさせる。彼女の顔が赤くなっているのは、羞恥のためか、憤怒のためか。

おそらく、両方だろう。

「信じられませんわ！ わたくし、退席させていただきます」

机をバンツと叩いて、昨日と同じように奥の部屋に行ってしまった。

「……ちよっとした、ジョークのつもりだったんだけどよ」

「いまのは、太一が悪いよ。完璧にセクハラだよ」

残った三人の女性陣は、冷やかな目で俺を見ていた。

第二章・その二

その日の夜。

俺は夕食を準備していた。今晚のメニューはカレーだ。俺のもっとも得意とするメニューである。なんてったって、作るのが楽だからな。

だが俺は、手抜きをするのは嫌いだ。なにをするにも一手間くわえたい。だからちゃんと玉ねぎをみじん切りにして、しっかりと炒めている。

フライパンの上で、徐々にきつね色となっていく玉ねぎを見るのは、けっこう気持ちのよいものだ。立ち上る匂いや、具材が焼ける音も心地いい。

料理というのは、食べるときの味覚だけでなく、五感で楽しむものなんだ。

「おい、太一！」

そんな俺の楽しみを、親父の怒鳴り声がぶち壊した。

「なんと言ったらわかるんだよお。メシの炊き方になってないぞ！」

「うるせーよ」

「父さんは、柔らかめの米が好きだと言ってあるだろう！」

「十分だろうがよ。これいじょう柔らかくしたら、お粥になっちゃうよ」

自分じゃ作らないくせに、いろいろと注文の多いやつだ。

だいたい、俺は硬めのご飯が好きなんだ。それを妥協して、親父に合わせた炊き方をしているのに。その上、文句をつけるなんてたまったもんじゃない。

「不満なら、親父が料理すりゃいいだろう」

「それができたら苦労しないじゃない。父さんの料理ベタ、太一も知っているでしょう」

たしかに親父の料理は、殺人級に不味い。俺はいつも疑問に思う。

「あんなに手先が器用なのに。なんで、料理がヘタなんだ」

「いやあ。父さんが作るのは、美しいもの限定だから」

「どういう意味だ？」

「旨いものは、父さんの手の対象外なんだよなあ」

「説明になってねーよ」

「いやあ。悪い悪い」

親父は頭をかいた。たいして悪びれた様子もなく、へらへらしている。

俺としては、親父に料理を覚えてもらいたい。そうすれば家事の負担がかなり減る。なんとか丸めこめないもんだろうか。

炒め終えた玉ねぎを煮込みながら、俺は説得をはじめめる。

「なあ親父。スペインの画家でよ、サルヴァドール・ダリっていただろっ」

「あの、シュルレアリストの」

「そうそう。んで、ダリの言葉にこんなのがあるんだよ。【美とは可食的なものであるっ】ってな」

「父さん。それ聞いたことあるな」

おお。食いついた。これは押しきれぬかもしれない。

「さっきの親父の発言を、くつがえす言葉だろっ。やっぱ芸術家ってのは、食えるもん作れなきゃダメなんだって」

「そこ！ 太一の言いたいことはね、父さんもよくわかる。ダリの言葉を知ったとき、ああ父さん料理がんばらなきゃなって思ったのよ」

「がんばってねーじゃん」

「だってさ、太一。考えてみてよ。ダリの絵に書いてある、あんなグチャグチャしたものがさ、実際にあつたらとてもじゃないけど食べられないでしょ。お腹こわしちゃっよ」

「……でもよ。時計が溶けてる絵、あるじゃん。あれなんかは旨そ

うだぜ」

「じゃあ太一は、溶けた時計が食べたいの。うん？　なら父さん、明日から溶けた時計の料理だしてもいいよ。うん？」

顎をしゃくりあげ、親父は俺をのぞいてくる。すぐくム力つく顔だった。俺は鍋の取っ手をにぎりしめる。

だが悔しいことに、俺には言い返す言葉がない。親父のしゃくり上げた顎を見ながら思う。まったく、食うことと屁理屈だけは、長けた口だぜ。

そこで、玄関からガチャツという音が聞こえた。蓮が帰ってきたのだらう。

「ただいまあゝ」

やけに疲れた声で、蓮は言った。ふらつきながら居間へ入ると、制服のままソファにダイブする。ラクロスの道具がその場に散らかった。

「蓮。道具は大切にしろよ」

「だって疲れちゃったんだもんゝ」

ソファに顔をうずめた。

「大会が近くて。練習がハードなんだよお」

「疲れたのはわかったから。早く起きろ。メシにするぞ」

ちようど煮詰まったカレーをよそいながら、俺は食卓へと並べていく。

「あ。レンは、たこわさだけでいいよ」

「だからそう言うなって。せつかく作ったんだから、食ってくれよ」

「でも、疲れすぎて食欲ないもんゝ」

「ちゃんとメシ食わねえと、力でないぞ。大会近いんだらう」

「ういゝ」

気怠い声を出して、蓮はカレーを運んでいく。

すると、テレビにかじりついていた親父が言った。

「いやあ、怖いね。誘拐だってよお」

「ん。誰が？」

「声優さんなんだけどさ、昨日の握手会から行方がわからないんだって」

ほらほらと、親父がテレビを指さしている。テレビではキャスタ―が事件を報道していた。

『昨夜未明から、声優のNさんが行方不明になっています。Nさんの行方がわからなくなったのは、ファン限定による、イベントの直後ということですよ。警察では、熱狂的なファンによる誘拐とみて捜査を……』

「怖いよねえ。これ絶対、ファンの仕業だよ」

「そうかな。仕事が嫌で逃げただけかもしれないぜ」

「いや、父さんにはわかるんだ。だってこの声優さんの声、独り占めしたくなるくらい可愛いもの」

そして親父は、声優Nが担当しているアニメのキャラを列挙した。

「“の使い魔”のルイーザでしょ。“けちやチキ!”の遠衛スバルでしょ。“かのわん”の平ちずるでしょ。“だぶりゅうだぶりゅうっ!”の石不動美緒でしょ……」

「その年で、そんなに知っているお前も怖いよ」

「あとね。最近はじまった魔法少女の……」

「もういいって」

親父にツッコミつつ、俺は夕食の準備を終える。リビングに濃厚なカレーの匂いがひろがった。

三人が各々の席につき、手をあわせた。

「いただきます」

そして、いざ食べようとした瞬間。

ピリリリリッ。

俺のケータイが鳴った。ディスプレイには『新世界銀河』とある。

いまからメシだったのに、タイミングの悪い奴だな。

「おう、どうした」

「ヤバイことになってるんだ！」

通話口から聞こえてきたのは、せっぱつまった銀河の声だった。

「なにがあったんだ」

「はやく！ はやく来てくれ」

「来てくれたって、どこにいるんだよ」

「ダニッチ公園！ たのむよ、もう俺一人じゃ……ああ！ もうダメ……」

「おい、銀河！ もしもし。もしもしっ！」

電話は、そこで切れていた。

「くそっ。何が起きてるってんだ」

奴の様子は尋常ではなかった。緊急事態であることは間違いない。

「ちよつと行ってくる」

俺は上着をとると、玄関へ向かう。

親父が心配そうに訊いた。

「なにかあったのかい？」

「よくわかんねえけどよ。とにかく、ヤバイことになってるらしい」

銀河はダニッチ公園にいると聞いていた。その公園は、墓地にかこまれた寂れた場所で、人通りは極めて少ない。もしかしたら、大きな事件に巻き込まれている可能性もある。急いだほうがいいだろう。

すぐに、家を出た。

公園に向かって走る。

「銀河。無事でいてくれよ」

つぶやきが、夜景とともに俺の背後へと流れていった。

第二章・その三

十分ほど走り続けて。

ようやく、ダニツチ公園にたどり着いた。

公園には銀河の姿はなかった。代わりに俺を待っていたのは、奴の弟である太陽だった。

彼はあろうことか、外灯の薄明かりのしたで、抱きまくらにキスをしていた。

「……ヤバイって、このことかよ」

たしかに、ヤバイことはヤバイ。今の太陽は、とても人に見せられるものではなかった。しかし、だからといって、あんな深刻な電話を超越することもないだろう。

「つたく。焦って損したぜ」

俺が息切れた呼吸をととのえていると。

「太一さん。おつかれッス」

背後から、聞き覚えのある声した。振り向いた先には、巨大なシルクハットがあった。

くるみだ。

「どうしたんだ。こんなところに」

「ボク、この近くに住んでるんッスよ。太一さんがものすごい形相で走っているのが見えたから、追いかけてきたッス」

「じゃあ、来るだけ無駄だぜ」

俺は太陽を指さして言った。

「ここにいるのは、あそこで抱きまくらにキスしてる男だけだ」

「ありやまッス。邪神が現れたのかと思って、翔子を呼んじやったッスよ」

太陽を一瞥してから、くるみがストラップだらけの携帯を取り出した。翔子への通信履歴が残っている。

その直後、草むらの中から人影が走ってきた。

「ついに邪神が現れたでござるか？」

息を弾ませた翔子だった。

「残念だったな。はずれたよ」

俺は翔子にも説明する。彼女はビククリした様子で太陽のほうを見ていた。まあ、急に呼びつけられてあんなものを見せられたら、誰だってそんな顔になるわな。

「ここに邪神なんていやしない。いるのは俺たちと、あそこのカッブルだけだ」

「太一殿。なにを言っているでござるか」

翔子は、分厚いメガネを押し上げながら言う。

「あれこそ、邪神が憑依した姿でござるよ」

彼女の視線の先には、魔法少女らしきキャラが描かれた枕を抱く、太陽しかない。

「そりやお前。いくらなんでも失礼だろう」

「失礼もなにもないでござるよ」

「抱きまくらにキスしたくらいで、邪神だなんてよ。趣味がちよつと行き過ぎただけだって」

「違うでござる。邪神が取り付いているのは、太陽くんのほうじゃなくて……」翔子は俺に向き直った。「あの、抱きまくらのほうでござる」

「な、なにい！」

「よく見るでござる。太陽くんの周りを、独特の闇が覆っているでござろう。あれが、少女悪夢^{アリス・マリス}。幻滅郷と幻夢郷が、重なった空間。

邪神がこの世界に侵食してきた証拠でござる」

言われてみれば、はじめてナイトゴーストと戦ったときのような暗闇が、抱きまくらを中心に広がっていた。もともと外灯しかないうす暗い公園だから、気が付かなかった。

「太陽くん……。彼とは、同じ中学だったでござる。趣味があつてよく話したでござるが。しばらく見ないうちに、一線を越えてしまったようにござるな」

翔子はニヤニヤしながら太陽を見た。笑っている場合じゃないと思っただが。

「とにかくだ。翔子、あそこにいるのはどんなヤツなのか、教えてくれ」

「魔法少女のプリンでござる。悪魔を召喚して戦うという設定あたり、我々の境遇と似ているでござるな。ちなみにプリンは「お兄ちゃん」とささやく声がかわいいと評判になり、ナンバーワン妹キャラの称号をもっているでござるよ。でも実態は、魔法少女と謳っておきながら相手をナタで惨殺する武闘派でござる」

「いやいや。抱きまくらじゃねーよ。邪神のほう」

「これは失礼」

翔子はまた、メガネを押し上げた。そうとうレンズが重いようだ。「拙者、オタクでござるからな」

「だからお前、そんなしゃべり方なのか」

「そうでござる。何をやるにせよ、成り切る覚悟が必要でござるからな」

ニヤニヤと笑う。成り切る覚悟もなにも、今時、ござる口調はないだろう。

「って。そんなことはどうでもいいんだって。抱きまくらに憑依した邪神は、何者なんだ」

「“ツアトウグア”でござる」

「詳しく教えてくれ」

「この世界には、物質を成り立たせる要素として“四大元素”と呼ばれるものがあるでござる。『水・風・火・土』」

「そっぴや、実乃莉が言っていたな。クトゥルーは水の神性を持つって」

「そのとおりでござる。邪神のなかには、四大元素の神性を司るものがあるでござるよ。そしてツアトウグアは、“土”に該当する邪神でござる」

翔子の説明が終わるころ。

魔法少女・プリンは、ヒキガエルのような巨体に変わっていた。耳が裂け、気だるそうな赤い瞳をこちらへ向けている。

だが、完全な憑依は終わっていないらしい。体の一部からは泥のような液体を垂れ流している。プリン体をコントロールしきれず、ちくはぐな動きをくり返す。

奴を覆っている暗闇が、激しくぶれていった。少女悪夢が安定していないようだ。

「ふたつの世界が融合しきる前に。ボクたちも、戦闘態勢をとるッス」

「では。まずは、拙者からお願いするでござる」

翔子が俺の前に立った。

そうだった。彼女たちを変身させるためには、キスをしなくてはならないんだ。

翔子には心の準備はできているようで、顔を上に向けている。

アヒルのようにすぼめられた厚い唇。すうっと通った鼻筋。レンズでよく見えないが、細められた瞳は凛々しい。

近くで見ると、彼女は美しい顔立ちをしていることがわかった。

お約束通り、メガネをとったら美少女なのだろう。

「失礼するぞ」

はじめて気づいた翔子の可愛さに軽くためらいながらも、俺は唇を接触させた。だが浅いキスでは足りない。彼女を変身させるには、ここから唾液を送り込む必要がある。俺は舌を出し、翔子の口内に侵入させた。

ふたつの舌が絡みあう。

「ん……」

翔子の悶えるような呼吸。俺の唾液が、彼女の喉を下りていく。じわじわと、翔子の体が黒く染まった。

「次は、ボクの番ッスね」

勢い良く、くるみが俺に抱きついてきた。背が小さいため、唇の位置を合わせようとすると、どうしても彼女の爪先が浮いてしまう。

俺は支えるようにして、くるみの背中に手を回した。

おちゃらけた雰囲気と、大きなシルクハットのせいで目立たなかったが。くるみもやはり、近くで見ると美少女の類であった。少し中心に寄った顔のパーツが幼さを残してはいたが、シルクハットのつばで翳った大きな瞳は、アルカイックな雰囲気を秘めている。ふたつの時間が同時に流れているような彼女の顔立ちは、倒錯的な色香があった。

にもかかわらず、加減も知らずに突きだした唇は、やはりあどけない。餌をせがむ小鳥のようにいじらしい唇へ、俺はキスをした。「はっ……」

くるみは蕩けるような瞳で、送りこまれた唾液を嚥下する。地面に着地させても、宙に浮いているようにポーツとしていた。彼女の皮膚が黒く染まっていくなか。頬だけは、最後まで朱色だった。

「なんか、ぼわっつとするッス」
キスを終えた彼女たちが言う。

「はあ。太一殿との接吻は、いいものでござるな」
フツ。これがキス神と呼ばれた俺の、真の実力よ。

しかし、今はそんなところに力を発揮している場合ではない。戦うべきは太陽に取り付いた邪神・ツアトゥグアではないか。

俺は、まだ呆けている彼女たちに言う。

「早く変身しろよ」
「……頭が、溶けそうでござるなあ」

「俺のキスでいいなら、後でいくらでもやってやるから！」
その言葉で、彼女たちは我に返る。

「ほ、本当でござるな」
ポケットからそれぞれの魔導書を取り出した。
白紙のページ一枚、破って宙へと放る。

「無名祭祀書よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾヘドロに誓って、我に力を与えるでござる」

「屍食教典儀よ。クトウルの呼び声に応じよ。胸に輝くトラペゾ

へドロンに誓って、我に力を与えるツス」

詠唱と同時に、彼女たちの衣服は消える。瞬く間に巨大化する白紙のページ。ふたりの黒い体を包んだ。

俺の唾液が、魔導書のページへ染みこんでいく。

くるみ。翔子。

ふたりの女拓が完成する。

彼女たちは白と黒の光に包まれて見えなくなる。ふたたび視界が晴れたとき、そこに立っていたのは。

髪の毛が触手になった、翔子とくるみだ。

変身完了。

戦闘の準備は整った。

第二章・その四

「あなたたちさあ。とつぜん出てきて、なんなわけ？」

太陽が俺たちをみて言う。奴はすっかり正気を失っていた。狂気に満ちた目で、涎をまき散らしながら叫んだ。

「僕とプリンの時間を、奪わないでほしいんだよね！」

「太陽。お前、いいかげん……」

俺が説得しかけたところで、

「ツアトウグアのやつ、能力を発動したツス！」

くるみが叫ぶ。見ると、ツアトウグアの周りにはボコボコと土の柱が現れる。ただの土の塊は徐々に形を変え、人に近い姿となっていく。胎児からの発育を見せられているような生々しい映像を前にして、さすがの俺たちにも緊張感が走る。

「フハハハハ！ 我が邪技、食らうがいい」

もはや原型をとどめず異形となった魔法少女・プリンが吼えた。

「土人形遊戯【ゴーレムダンス】！」

ヤツの声に反応して、土人形が最後の発育を終える。完成した土人形は、ツアトウグアが憑依する前の、プリンの容姿になっていた。金髪ツインテールのフワロリファッション娘が、約二十体。俺たちへにじり寄りながら、いつせいに「お兄ちゃん、だーい好き」と嬌声を上げている。

異様な光景だ。

「敵さんも趣味が悪いぜ」

「そうでござるか。拙者は、テンションがあがるでござるが」

翔子はオタク心がうずくのだろう。今までにないほどニヤニヤしている。

「まったく。悪夢つてのは、悪趣味な夢つてことみてえだな」

「太一さん。くるツスよ！」

土人形どもがいつせいに襲ってくる。「お兄ちゃん」「お兄ちゃ

ん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」
「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」……………。

甘ったるい声を出しながら、飛びかかる。

俺は迫りくるプリンたちを丸腰で迎撃する。女を殴るにはいささか抵抗があつたが、相手はアニメキャラを模した土人形だ。このさい構うまい。

人形どもの動きはにぶく、また脆い。たった一撃くらわせただけで崩れる。

「どうやら、俺の敵ではないみたいだな」

すべて撃退し終えた俺は、公園に点在する土の塊を見渡して言った。

だが。

「その程度で、仕留めた気になるな。クトウルと人の雑種よ」

プリンに寄生したツアトウグアが言うと、崩れたはずの土がまたしても蠢きだした。土片はぬるぬるとナメクジのように這いまわり、またしても魔法少女の形となる。

しかも今度は、全員がナタを持っている。

右手に握られた鈍い刃物を見て、俺は思う。さすがに丸腰で敵う相手ではなさそうだ。

武器を手にしたものの、プリンたちは完全に固まっておらず、動きがのろかった。倒すなら今しかない。

「ちよつと待ったッス！」

くるみが、俺の前に出て身構えた。

「ここは、ボクの力を見せるときッスよ」

「大丈夫なのか。相手はナタ持ちだぞ」

「平気ッス。太ーさんはそこで見ててくださいッス」

くるみは俺を制して、仁王立ちになる。振り返ったまま上着の裾をまくり上げた。

「邪技・臍で茶を沸かす【マッド・ティーパーティー】！」

へそ出しルックになり、技名を叫ぶと、

「ギャハハハハハッ！ オエツオエツ！ ヒーヒーッ！」
大笑いをはじめた。

夜の公園に、くるみの笑い声が轟いていく。

「ヒーヒーッ！ ボ、ボクの技は、大笑いすることで……ギャハハハッ！ へ、へその周りにある空気中の水分を、ふ、フハッ！ フハッ！」

「なるほど、解った」

俺は、くるみの解説を引き継いだ。

「お前の能力は、笑うことで熱湯を作り出すんだな」

「そ、そうツス！」

笑いすぎで目に涙を貯めている。見た目はマヌケだったが、くるみの周りからはじわじわと蒸気が立ち上ってくる。お湯が湧きはじめたようだ。溜まった涙も蒸発し、目元で塩になった。

「さあ、食らいやがれツス」

臍で沸かしたお湯を土人形に放つ。熱湯が弧を描いて、プリンを模った人形の手足にかかる。

しかし、効果が浅い。くるみの熱湯は、土人形の一部を溶かすだけで、いまひとつダメージを与えていなかった。

「アーハッハッハ！」

新しく響きわたった笑い声は、太陽のものだった。俺たちの戦いぶりを見て大笑している。

「僕のプリンには、効いてないようだねえ」

「太陽！ お前いいかげん、目を覚ませよ」

「やだなあ。なにを言ってるんだか。僕とプリンはこんなに愛し合っているんだ。だからプリンはこうして、三次元まで会いに来てくれたんじゃないか」

ヒキガエルのように浮腫んだプリンを抱き寄せる。

「それは違うぞ、太一。愛とかそういうんじゃないんだ」

「嫉妬ですか。見苦しい」

太陽はクツクツクと笑う。ちくしょう。話が噛み合わないな。ど

この世界に、抱きまくらへ恋する男に嫉妬するやつがいるんだよ。とはいえ、今は事情を説明している暇はない。どのみち太陽を説得したところで状況はかわらないのだ。

俺は土人形の群れに向き直る。ナタを持ったプリンが、完成しようとしていた。

「なめてもらっちゃ困るツス。ボクの本当の力は、これからツスよ」
くるみがシルクハットの中から、ヤカンとティーカップを取り出した。何を思ったのか。先ほどのお湯で、お茶を淹れはじめた。

「おい。茶なんて飲んでる場合かよ」

「心配いらないツスよ、太一さん。これこそボクの真の力ツス」

「真の力……」

「幻夢郷での狂ったお茶会を、再現するツス！」

くるみは旨そうに淹れたての茶を飲んだ。がぶ飲みだ。

その途端。

彼女の全身が、またたく間に躍動していく。すべての肉が筋肉に変わったように、硬く盛り上がっていた。つるぺただった体型は激変し、完全にアスリートの体格となった。

自慢気に、上腕二頭筋へコブを作ったくるみ。まさに小さな巨人だった。

「幻夢郷じこみのお茶には、ボクをパワーアップさせる効果があるツス」

ギャハハハハハッ！
くるみはまたしても大笑いした。だが今回は、いつもの理由のないバカ笑いとは違っていた。

圧倒的な力の差を確信した、不敵な笑みであった。

「さあ。狂ったお茶会へ、ようこそツス」

くるみが暴れる。本人が言ったとおり、身体能力はいちじるしく向上しているようだ。

バググンの破壊力で、土人形を粉碎する。

くるみの笑い声は止まらない。ギャハハハハハッ！
人形をすべて破壊したというのに、まだ笑っている。

「そのチビ筋肉娘。やるじゃないか。だがな、そいつらは何度だつてよみがえるぜ」

太陽が右腕をかかけ、パチンと指を鳴らした。またしても泥がナメクジのように蠢きだす。

これじゃ、きりがないぞ。

「ちよつと待つでござる」

今度は翔子が俺の前に出た。

「拙者のこと、忘れてもらっちゃ困るでござるよ」

太陽のほうへゆっくりと近づいていく。翔子はほくそ笑みながら言った。

「邪技・神出鬼没の艶笑【キャットウォーク】」

「なっ、なんだよそれ」

「お主の体に、ちよつとした細工をさせてもらったでござる」

口を最大までひろげて、ニヤニヤと笑った。

「太陽殿。お主の体は、“DHMO”に侵されているでござる」

「D……？ だからなんだよ！」

「正式名称、ジハイドロゲン・モノオキサイド Dihydrogen Monoxide……。略してDHMO。この物質の特徴をざつと挙げると。これは、水酸の一種で酸性雨の主成分でござる。腐食を進行させ錆びつかせるでござる。残酷な動物実験に使われているでござる。悪性の腫瘍からも検出されるでござる。地形を侵食し地図を描きかえる力を持つでござる。そして、この物質を摂取したものは。必ず、死ぬでござる」

翔子のメガネが鈍く光った。ニヤニヤと、陰湿な笑いをつづけている。

少女悪夢が生んだ薄闇のなかで、太陽の顔がこわばった。

「そ、そんな危ないもの、僕に流し込んだのか！」

「そうでござる。もっとも、DHMOの一般的な名称というのは。

……ただの“水”でござるが」

静かに肩をふるわせて忍び笑う。

「ジョーク。でござるよ」

「な、なんだよ……」

「しかしまあ、太陽殿。水というのは、実に多様なものでござるな。人体にとつては都合良くも、悪くもなるでござる。拙者の邪技・キヤットウォークは、その水のあり方を、限定的に変えられるでござるよ。たとえば、こんなふう」

翔子は胸の前からぐるりと両腕をひるげる。その先には、再生を試みる崩れた土人形たちがいた。だが、いつまでたつても固まらない。

柔らかい土はちぐはぐに絡まっていた。肘のあたりに胸があったり、頭の前から足がはえたりと、とても人体とは思えない形状になっている。

「土人形に含まれる水分を、油に変えさせてもらったでござる。油は水に比べて乾燥しにくいでござるからな。なかなか固まらないでござるよ」

にやつく翔子。

公園を走りまわりながら笑ってくるみ。

ふてぶてしく笑う彼女たちを見て、俺は思った。

強い。

幻夢郷の力、恐るべしだ。

第二章・その五

「どくどくんなもんだいッスよおおお」

勝利の余韻にひたっているんだろう。くるみが焦点の合わない目を泳がせながら言う。まだ紅茶の効果が切れていないようで、筋肉隆々のテンションMAX状態だ。

「よくやったぞ、くるみ」

俺は素直に感心していた。しかし彼女は聞く耳をもたず、

「まだまだやれるッスよおおおお！」

と、暴れている。

「いや、もういいんだ。お前の出番は終わった」

「ボクのかちゅやくは、これからッスよおおおお」

ろれつの回らない口調で、わめき散らすくるみ。血管の浮き出た腕をふり回している。

「くるみ殿。拙者たちの役目は終わったでござる。あとは太一殿にまか……」

「おみゃーは、ひっこんでろッスううう！」

なだめるために近づいた翔子を、全力でふっ飛ばした。翔子はゴロゴロと十メートルほど転がり、うつぶせの状態で止まる。ピクリとも動かない。どうやら、気を失っているようだ。

殴ったくるみも、ほとんど意識を失っているようだ。千鳥足のまま公園内をふらついている。いったい、あの紅茶には何が入っていたんだろう。くるみは前後不覚のまま遊具に激突すると、翔子に覆いかぶさるようにして倒れた。

ふたりとも動かなくなつた。

「なにやってんだよ」

めずらしく寝てみたら、この有様だ。

まあいい。お前たちはよくやった。

ここからは、俺の仕事だからな。

イボだらけに肥大化したプリンと向き合う。少女悪夢のせいですらに暗くなつた闇のなか、あいつに憑依した邪神を追い払うため、俺は今からキスをする。

「俺がその悪夢、目覚^まませてやる」

唾液を流し込み、ツアトウグアの力を相殺させれば、ゲームセツトだ。

しかしここで伏兵が入る。

太陽が、俺とツアトウグアの間に入った。

「僕たちの愛を邪魔するやつは、許さないからな！」

「いやさ。愛っていうけどよ。そもそもあれは、抱きまくらなんだぞ」

「そんなこと関係ない！」

太陽はその場に崩れ落ちる。地面に何度も何度も、頭を叩きつけながら叫んだ。

「僕はプリンが好きで好きでしょうがないんだ大好きなんだ世界でいちばん愛しているんだ！いつもプリンだけを見ているしプリンだつて例えどこにいたつて僕だけを見ているんだ！だから二次元の中から僕を見つけて抱きまくらの中に入ってくれたんだプリンが僕のそばで動き出したんだよやっぱり僕の愛は本物なのさついに僕の想いが二次元に通じたんだ！」

額から血を飛び散らせながら、太陽は頭を叩きつける。

彼には残念なことだが。抱きまくらが動いたのは、愛が通じたわけじゃない。邪神に乗り移られたからだ。

「あんな。太陽。じつは……」

「うるさあい！ 誰がなんと言おうとやっぱり僕だけがプリンにとつて本当のお兄ちゃんだったんだ！アニメの中でなぜか「お兄ちゃん」と呼ばれてやたらと親しげにしていた二次元の男がいたけれどあんなのは全部まやかして何かの間違いにより物語上そういう設定をされてしまったけれどプリンの本当のお兄ちゃんは僕だけなんだ

「だからプリンはいつも僕に向けて「お兄ちゃん」と呼んでいたんだね次元の壁を超えて語りかけていたんだねありがとうプリン！」

「おい。お前は、なにを言っているんだ」

どうして、こんなになるまで放っておいたんだよ。

絶句する俺にかまわず、太陽はまだ愛の告白をつづけている。

「僕はプリンがいるだけで幸せすぎて死んでしまいそうになるいつそのことそのまま死んでしまえたらいいのにどうして人は幸せによつて死ぬことができないんだろうそれができたのならプリンのことも僕の幸せで殺してしまえるのに！ねえプリン。プリン！プリイイイイイ！」

涎を撒き散らしていた。全身が激しく痙攣している。

太陽の告白は、あまりにも一方的すぎた。

プリンに憑依したツアトウグアでさえ、ちよつと引いている。

もう太陽には、周りが見えていないのだろう。うつぶせになりながら、大地に向かって叫ぶ。

「だけどある時プリンにキスする僕へ兄さんが言ったんだよ！「おい太陽、これはただの絵だぞ」。はあ？それがどうしたっていうんだそんなこと言ったら兄さんだつてただの肉じゃないかYO！僕にとつて重要なのはプリンが絵だとか肉だとかそういう問題じゃないくてただプリンが僕のそばに存在することを感ぜられるかどうかなんだ。アニメのキャラは絵だから存在しなくて人間は肉だから生きていることを認められるというのなら逆に問おうじゃないか！僕たち人間は生命を産み出した神によつてプログラムされたCGみたいなもんじゃないの！」

「たしかに。俺たちはCGかもしれないねえな」

俺の言葉に、ようやく太陽が反応する。

血と涎と泥にまみれた顔を上げた。

「いま、なんて……」

「俺たちは、神にプログラムされているCG。それは認めるよ」

「なら、僕は……」

「だけだよ。その神が正しいなんて保証は、どこにもないんだぜ」
俺は太陽の顔を、袖でぬぐってやる。

「人間は、運命を自分で書きかえられんだよ。お前は下手くそな神のシナリオに振り回されただけだ。そんなもの、全部リライトしてやるっぜ」

「リライト……？」

「ああ。お前ならできるさ」

俺は太陽の肩を抱いた。

なんて盛り上がるシーンなんだ。自分で言っつて、ちょっと感動してしまっただぞ。

だが。

俺らをみていたツアトウグアが、退屈そうに言う。

「あのさあ。大切なこと、忘れてるんじゃないやねええええの？」

「なんだよお前。まだいたのかよ」

「ちよつと失礼じゃん。それになに、下手なシナリオって。誰のことなの。ねえ」

「自覚あるなら黙ったらどうだ、ヒキガエル野郎」

俺はツアトウグアに殴りかかった。

動きがのろい。ヤツは微動だにすることなく俺の拳を受ける。

クリティカルヒットだ。

鳩尾にめり込んだパンチで、ツアトウグアはその場に崩れ落ちる。殴った瞬間、何かが破裂する感触があった。ツアトウグアの古くなったゴムみたいな腹ではなく、生々しい手応えだった。最近の抱きまくらは、こんなにリアルに作られているのか。

動かなくなったツアトウグア。

ヤツの体を抱き上げながら、俺は太陽を振り返る。

「さあ。いまから、お前の新章がはじまるぜ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800z/>

邪神のディープ・キス ~ワンダーランドは眠れない~

2011年12月20日01時46分発行